

9



日本  
国語  
大辞典

ささ-しとん



# 日本國語大辭典

第九卷

編集 日本大辭典刊行會

發行 小學館

日本国語大辞典 第九卷

昭和四十九年五月一日 第一版第一刷発行 ©  
昭和五十五年七月一日 第一版第六刷発行

編集 日本大辞典刊行会

発行者 相 賀 徹 夫

印刷者 小 林 清

発行所 株式会社 小 学 館

東京都千代田区一ツ橋二一三ー一  
〔郵便番号〕一〇一〔振替〕東京八二〇〇

造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

ささ【名】水底にたまたかす。どろ。おり。\*東大寺諷誦平安初期点。心が内の浄土を我等が見ずして、愚人の涙(ササ)の白玉を鏡ぬが如し。【附註】他に用例がなく、あるいは「さされ」などの下部省略表記か。

ささ【名】①イネ科のタケ属で小形のもの。総称。一稔性で高さ〇・二六尺。根茎は地中を横にはう。稈(かん)は細長い中空の円柱形で節がある。葉は先のとがった狭長楕円形で基部は鞘(さや)となつて稈を包む。タケに対してふつと稈のびるまでの子の皮が落ちない。実はだんごにして食べ、稈はパルプにしたり種々の家具や器具をつくる。葉は(ちまき)や(かま)すし、和菓子や包むのに用いる。東アジア、特に日本には、各地に広く分布し、クマザサ、チンマザサ、チマキザサ、ミヤコザサなど種類も多く、しばしば観賞用に庭に植えられる。笹草。\*古事記「上天の香山の小竹葉を、手草に結びて八小竹を訓(さ)みて佐佐(ササ)と云ふ」。\*古今物語名「四五四(さ)まてびばせをば、いさつに時まつまにぞ日はへぬる心ばせをば人に見えつ(紀乳母)」

⑩巻本和名抄「〇笹 蔦助切韻云篠(先鳥反)之乃小竹散々細々小竹也。\*名語記「六小竹をささとなづく如何。答、ささは笹也、小竹也」。⑪(酒) (中国で酒を竹葉と呼んだところから。また「さけ」の「さ」を重ねたものともいう。酒をいう女房詞。\*虎明本狂言「比丘貞比おりやうが所へは、はうはうからささをとくさんにしたるに」。\*日葡辞書「Sasa(ササ)すなわち、サケ酒、酒、女性のことば」。\*浮世草子「武家義理物語二・三「御酒宴かさなり、女中世ねよりは、ささすとして」。\*女中詞(元禄五年)「九こんささ酒の事」。\*随筆「榜海一得上「今女の言(ことば)に酒をささと云、養老の雑劇(うたい)にも、またいのちくえふと云、遅々(しやうじやう)に竹のはの酒と云」。⑫紋所の名。竹の葉や枝などをかたどつたもの。三枚笹、九枚笹、根笹、雪持根笹、笹に雀、上杉笹、宇和島笹、仙台笹、鳥居笹、山口笹などの種類がある。

⑬能楽や演劇の道具の一つで、狂女の持つて出る笹。狂い笹。また、宮廷神楽で用いた笹(ささ)の採物(とりもの)。\*雑俳「柳多留拾遺巻一九「氣ちかひは絵にかく時は笹をもち」。\*因園「京都府和歌山県東牟婁郡新宮町 広島県 三原町 山口県「おささも少しはよろしゅうござります」。\*因園「(1)ササダケ(細小竹)の下略。ササ(笹)は、ササ(小竹)が一種の竹の名として固定したもので「大言海」。ササ(小竹)の義(日本積名・名言通・和訓栞)。(2)葉の触れ合



う音から(和句解古事記伝・大言海・日本語大辞典・松岡静雄「音論」幸田露伴)。⑬シカサ(然下)、またはシバンタ(柴下)の反(名語記)。⑭サシノハ(小笹葉)の義(日本語源学「林麩臣」)。⑮(2)について(1)に酒をすすめる時のことばから(綜合日本民俗語彙)。⑯(2)君にササグルの略語(紫門和語類集)。⑰サケ(酒)のサを重ねた語か(古事記伝・和訓栞大言海)。⑱(4)の異名「竹葉を和語化した語か(嘉良喜隨筆・漫筆隨筆・閑客瑣談・和訓栞)。⑲(5)「酢々」が国語化したもの(日本語原考「与謝野寛」。\*因園「今史平安」)。⑳余之。㉑因園和名・色葉・名義和玉文明伊宗。明心天正・羅漢林書畫。

ささが根(ね) 親見出し  
ささに(観)あられ さわがしいことのととえ。  
\*雑俳「若葉(若葉)・宵寒師(笹)に電の娘ども」  
ささに(雀)すめ 紋所の名。笹に雀のいる模様を図案化したもの。\*浄瑠璃「源義経将基経道行」ささに雀の鐘じるし、やれにしとて兄弟よ。【因園】  
ささの(青)あお 襲(かさね)の色目の名。表は白で裏は青。壮年の狩衣に多く用い、春用いる時は柳髪(やなぎがさね)といひ、冬は松の雪ともいう。  
\*雁衣抄「布衣事。略々(略々)笹。表白。裏青。三四十人之着之。装束抄「笹青。同柳」。【因園】  
ささの(庵)いおり・いお 笹の葉で屋根をふいた庵。草庵。笹の屋。\*永久百首秋「よしの山みねの嵐のはげしさにささの庵は露もたまらず大進」。  
\*新古今恋二・一〇「逢ふことはかたの里のささの庵しに露散る夜の床かな藤原俊成」。  
\*俊成卿女集「真柴たぐさのいはりの夕煙いとどかすかに吹く風かな」。\*玉葉「旅。一八六「かりそめと思ふ旅寝のささの庵も夜や長からむ露の置きそふ藤原俊成」。  
ささの(魚)うお 「ささうお(笹魚)に同じ。\*俳言集「ささの魚 飛騨(飛騨)笹より化する魚のよし」  
ささの(隈)くま (地名)ひのくま(檜隈)に接頭語「さ」の付いた「さひのくま」が「ささのくま」と誤られ、「笹の隈」と解されたもの。生い茂った笹によつてできた物か。\*古今神あそびの歌「八〇「ささのくまひのくま河にこまどめてしばし水かへ影をだにみむ」。\*平中「三九「いつはりぞささのくまぐまありしかば檜(ひ)の隈(くま)川は出でて見ざりき」。\*源氏「権本「むつかしげなるささのくまを、駒ひきとどむる程もなく、うち早めて片時にまわりつきぬ」。\*因園「古今集」の歌は「万葉集」二・三〇九七では「左檜隈(さひのくま)檜(ひ)の隈に馬とどめ馬に水かへ吾よそに見む(作者未詳)」とある。  
ささの子(こ) 篠竹(しのだけ)のたけのこ。小ささが柔らかで美味。篠子(すずのこ)。\*季・夏

ささの(鯛)たい 笹の先に、吹抜きの鯛をつるした玩具。  
ささの(露)つゆ ①笹の葉におく露。\*山家集下「庵さす草の枕に伴なひてささの露にも宿る月かな」。②酒。または少量の酒をいう。\*続編翁道話「上二時にかの年よりは、酒と聞いては、笹(ササ)の露(ツユ)にも酔ふ程の下戸じや」。③親見出し  
ささの(戸)と 笹で作った戸。また、笹の生い茂った門戸。ささと。\*玉二集「ささきかす野守が庵のささのともあらはにおける秋の朝露」  
ささの(葉)は ①小さい竹類の葉。ささば。\*万葉二・一三三「小竹之葉(ささの)はみ山もさやにさやけどもわれは妹思ふ別れ来ぬれば柿本人麻呂」。\*枕三〇六日のいとららかなるに「小舟を見やるこそいみじけれ遠きはまことに、ささの葉を作りてうち散らしたるにこそ、いとよう似たれ」。②湯立(ゆたて)の巫女(みこ)が神託を受ける時に持つ熊笹の葉。\*雑俳「柳多留二五「笹の葉へ折ちからむみだれ髪」。\*雑俳「柳多留四二「神の声色笹葉を顔へ当て」。③酒をいう。\*和英語林集成(再版「Sasaba」)ササノハ「小竹葉(ササ)ケに与えられた名。または、日本の強い蒸溜酒」  
④「ささのはが(笹葉貝)に同じ。【因園】  
余之。【因園】  
ささの(巻)まき 「ささまき(笹巻)に同じ。\*御湯殿上日記「文明一九年三月二五日「きたこうちとささの丸(まる)」。紋所の名。葉のついた竹を束ねて円形にしたもの。【因園】  
ささの(丸)まるや 笹の葉で屋根をふいたそまつな家。笹ぶきの仮家。\*隣女集「三「ふしわびぬ霧乱れて霜水るささのまろやのよはのさむしろ」。  
ささの(実)み ①竹の実。自然杭(じねん)。②酒の粕をいう女房詞。\*日葡辞書「Sasani(ササノミ)。すなわち、サケノ、カス(サケ)酒をしばった後に残る残滓。女性語。【因園】  
ささの(餅)もち 米の粉のだんごを、笹の葉で粽(ちまき)のように包んだもの。岐阜県の平湯温泉の名物。【因園】  
ささの(屋)や 笹の葉で屋根をふいた家。笹のやどり。笹のいおり。\*万代恋四「ささのやにあやめ草をふきそへてひまなく今日人は人ぞ恋しき道命」。\*続拾遺「藤原六九三「かり枕ゆめも結ばずささのやのふしうきほどのよはの嵐に藤原為教」。\*浮世草子「武家義理物語四・一」とかくは御ころまかせにと、先笹(ササ)の屋のせまき住ひをお目かけ」  
ささの(宿)やどり 「ささ(笹)の屋」に同じ。\*曾丹集「あさち生ふるをのしの原草ふかみささの

やどりを誰か知るべき」  
ささの(雪)ゆき ①網漣(あみなみ)豆(まめ)ごしどうふの風雅な呼び方。そのなめらかさを、笹の葉に積もった淡雪に見立てたものという。淡雪(あまゆき)ごしどうふ。\*人情本「音響春雨」前・二回「有合したる酒肴・紅葉豆腐も笹(ササ)の雪(ユキ)」  
②豆腐料理の一つ。文化文政二(八〇四)二九ころから、江戸根岸新田(東京都台東区根岸)の料亭で売り出された。葛(くず)汁(すいじゆ)をかけた網漣豆腐。吉原帰りの客で繁昌し、根岸名物となつて現在に至る。また、その店名となる。\*人情本「花街寿寿女下」笹(ササ)の雪(ユキ)は当時流行でござりまするがあまり上品過ぎて、私しなご矢張歳前の祇園がよろしうござりまする。\*歌舞伎「因幡小僧夜斬序幕」田町から吉原へ行かうか、いっそ今日は午の日だから笹(ササ)の雪(ユキ)で飯を仕上げ、根岸通りをぶらぶらと飛鳥山から王子へ行かうか。\*浮雲「葉草四迷」一六「芝居はマア芝居として、如何でや、明日後日団子坂へ菊見といふ奴は、略々(略々)笹の雪(ユキ)がすく落ちる様に、首や胸がすく落ちることを表現して」武士が刀につけた名。\*武家名目抄「刀剣部・笹雪、増補家忠日記云天正十二年四月九日略池田が刀八條の雪と号する名剣也」を永井に授く。④紋所の名。笹の上に積もった雪を図案化したもの。雪持笹。【因園】  
余之。【因園】  
ささの(脇)わきば (笹竹の横に出た末の葉の意)直系から分かれた系統の人をいう。傍系。支系。\*狭衣物語四「むかし人の代りには、ささのわきはにて頼むべきやうに、言ひ契りしかひなる」  
ささの(名)な 植物「ささげ(豆蔻)をいう女房詞。\*大上萬御名之事「ささげささ。女重宝記(元禄五年)一・五「ささげはささ。\*女中詞(元禄五年)「ささとは小角豆」  
ささの(名)な 岩手県や仙台で、着物の裾(すそ)をいう。ささの(名)な 手紙のことをいう、盗人仲間の隠語。「日本隠語集」  
ささの(名)な ①植物、あさ(歴)。秋田・大分両県一部  
②あま(巫婆)。新潟県一部  
ささの(佐々)ささ 姓氏の一つ。【因園】  
ささの(些)ち ①「些些」形動タリ「すこしばかりのさま。わずか。\*小説神髓「坪内逍遙上・小説の変遷」曾次第にさかえて、勢強大なるにいたれば、人の心おのづから散りて些々(ササ)たる事を巨大にひなし」\*福翁百話「福沢諭吉五、然かも其照応の正確なるは絶対の真に於て、些々(ササ)たる人間たるの確着を許さざるものなり。\*旧唐書「陽嗣復伝「近日事亦漸好、未免些些不公亦無甚処」。【因園】  
余之。【因園】

ささ【壁懸】形動タリ。高く険しいさま。壁懸。草枕。夏目漱石「一丈余りの蒼黒い岩が、真直に池の底から突き出して濃き水の折れ曲る角に、壁々と構へる右側には」

ささ【瑣瑣】形動タリ。こまかいさま。こまごまとしているさま。また、くだくだしいさま。\*本朝文粹一六・申民部大輔状・論直幹「然而蒼蒼之玄遠難答、瑣瑣之素懷未遂」\*西国立志編・中村正直訳「五、三」\*然れども瑣々たる流俗の説と侮て、これを査察するもの一人もなかりけり」\*一家内の珍聞・国木田独歩「折角の平和な家庭も、まことに瑣々ササたる原因のために、飛んだ醜体を現はすこととなる」\*詩経・小雅・節南山「瑣瑣姻婭、則無無仕」

ささ【然】副詞。その重なるさま。(1)同意を表わす。そうそう。さようさよう。\*宇津保俊蔭「いとうつくしげに調じたる唐鞍をとりいだして」「これはなに、すべき物ぞ」と見えれば、ささ、これして、いとうつくしげなまつるべかめり」(2)具体的な叙述を省略し、内容の存することだけを形式的に指示する。しかしか。\*蜻蛉下・天祿三年「今はかたちをもことになしてむとてなん、ささのところに月ころはものせらるる」\*蜻蛉下・天祿三年「又の日かへりて、ささ、なるといふ」\*源氏行幸「ささのことを、そそのかしと中宮かくておはし」

ささ【副】(多く)「と」を伴って用いる。(1)風が吹く音などを表わす語。さささ。\*名語記一六「風のささ」とふく如何。颯々をいふにや。音のささとして、ゆる也」\*源平盛衰記三・澄憲祈雨事「扇をひろぎて、殿上をささと扇ぎ散らして」(2)水などが勢よく流れたり、そそぎかかったりするさまを表わす語。ささ。\*名語記一六「水のながるるをとのささ如何。さらさらの反ればささ也」\*徒然草一「四」御牛を追ひたりければ、あがきの水、前板までささとかかりけるを」

ささ【感動】はやしことば。\*古事記中・歌謡(この御酒(みき)は我が御酒ならず、略豊寿(はき)き、寿き(も)とほし(奉)ま(こ)り来し御酒(みき)を、残(のこ)さず(飲)ませ(佐)佐(ササ)サ」\*古事記中・歌謡「この御酒(みき)の御酒のあやに転(う)た(だ)のし(佐)佐(ササ)サ」(2)人に物事を勧めたり誘ったりする時に発する語。さあさあ。\*清和抄・浮世床・初・中「ササいはんすなそこちやて。そりや立(た)ち(な)い(と)つ(と)の横(よ)り(ち)や」\*歌舞伎・三人吉三廓初賀・序幕「ササもう

よい、その貞節な詞を聞く上はおれも安堵ぢや」  
ささ【副】(多く)「と」を伴って用いる。人々が声をたて、さわがしいさまを表わす語。がやがや。さわさわ。\*落窪二「皆のしりて、ささとして出で給ふすなはち、あご告げに走りせやりたれば、栄花浦々の別、いかにいかにと、覚し渡る程に御色あり。ささとのしり騒ぐ程に、哀に傾しき方なし」\*大鏡一六「道長下、これはまた聴聞衆共、ささとわらひてまかりなき」

ささ【坐作】「名」すわることとたつこと。たちい。身のこなし。起居。↓坐作進退。\*閑園會之因  
ささ【名】(因)川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡① ② 川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ささ【副】(多く)「と」を伴って用いる。(1)水が勢よく流れたり、雨が激しく降ったりするさまを表わす語。さあさあ。\*名語記一六「水のながるるをとのささ如何。さらさらの反ればささ也」\*徒然草一「四」御牛を追ひたりければ、あがきの水、前板までささとかかりけるを」

ささ【名】(因)川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡① ② 川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ささ【副】(多く)「と」を伴って用いる。人々が声をたて、さわがしいさまを表わす語。がやがや。さわさわ。\*落窪二「皆のしりて、ささとして出で給ふすなはち、あご告げに走りせやりたれば、栄花浦々の別、いかにいかにと、覚し渡る程に御色あり。ささとのしり騒ぐ程に、哀に傾しき方なし」\*大鏡一六「道長下、これはまた聴聞衆共、ささとわらひてまかりなき」

ささ【名】(因)川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡① ② 川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ささ【副】(多く)「と」を伴って用いる。人々が声をたて、さわがしいさまを表わす語。がやがや。さわさわ。\*落窪二「皆のしりて、ささとして出で給ふすなはち、あご告げに走りせやりたれば、栄花浦々の別、いかにいかにと、覚し渡る程に御色あり。ささとのしり騒ぐ程に、哀に傾しき方なし」\*大鏡一六「道長下、これはまた聴聞衆共、ささとわらひてまかりなき」

ささ【名】(因)川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡① ② 川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ささ【副】(多く)「と」を伴って用いる。人々が声をたて、さわがしいさまを表わす語。がやがや。さわさわ。\*落窪二「皆のしりて、ささとして出で給ふすなはち、あご告げに走りせやりたれば、栄花浦々の別、いかにいかにと、覚し渡る程に御色あり。ささとのしり騒ぐ程に、哀に傾しき方なし」\*大鏡一六「道長下、これはまた聴聞衆共、ささとわらひてまかりなき」

ささ【名】(因)川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡① ② 川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ささ【副】(多く)「と」を伴って用いる。人々が声をたて、さわがしいさまを表わす語。がやがや。さわさわ。\*落窪二「皆のしりて、ささとして出で給ふすなはち、あご告げに走りせやりたれば、栄花浦々の別、いかにいかにと、覚し渡る程に御色あり。ささとのしり騒ぐ程に、哀に傾しき方なし」\*大鏡一六「道長下、これはまた聴聞衆共、ささとわらひてまかりなき」

ささ【名】(因)川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡① ② 川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ささ【副】(多く)「と」を伴って用いる。人々が声をたて、さわがしいさまを表わす語。がやがや。さわさわ。\*落窪二「皆のしりて、ささとして出で給ふすなはち、あご告げに走りせやりたれば、栄花浦々の別、いかにいかにと、覚し渡る程に御色あり。ささとのしり騒ぐ程に、哀に傾しき方なし」\*大鏡一六「道長下、これはまた聴聞衆共、ささとわらひてまかりなき」

ささ【名】(因)川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡① ② 川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ささ【副】(多く)「と」を伴って用いる。人々が声をたて、さわがしいさまを表わす語。がやがや。さわさわ。\*落窪二「皆のしりて、ささとして出で給ふすなはち、あご告げに走りせやりたれば、栄花浦々の別、いかにいかにと、覚し渡る程に御色あり。ささとのしり騒ぐ程に、哀に傾しき方なし」\*大鏡一六「道長下、これはまた聴聞衆共、ささとわらひてまかりなき」

家の御身分に、あるまじき事ながら、濡た袖故ささいもなく」

ささい【名】(因)川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡① ② 川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ささい【副】(多く)「と」を伴って用いる。人々が声をたて、さわがしいさまを表わす語。がやがや。さわさわ。\*落窪二「皆のしりて、ささとして出で給ふすなはち、あご告げに走りせやりたれば、栄花浦々の別、いかにいかにと、覚し渡る程に御色あり。ささとのしり騒ぐ程に、哀に傾しき方なし」\*大鏡一六「道長下、これはまた聴聞衆共、ささとわらひてまかりなき」

ささい【名】(因)川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡① ② 川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ささい【副】(多く)「と」を伴って用いる。人々が声をたて、さわがしいさまを表わす語。がやがや。さわさわ。\*落窪二「皆のしりて、ささとして出で給ふすなはち、あご告げに走りせやりたれば、栄花浦々の別、いかにいかにと、覚し渡る程に御色あり。ささとのしり騒ぐ程に、哀に傾しき方なし」\*大鏡一六「道長下、これはまた聴聞衆共、ささとわらひてまかりなき」

ささい【名】(因)川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡① ② 川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ささい【副】(多く)「と」を伴って用いる。人々が声をたて、さわがしいさまを表わす語。がやがや。さわさわ。\*落窪二「皆のしりて、ささとして出で給ふすなはち、あご告げに走りせやりたれば、栄花浦々の別、いかにいかにと、覚し渡る程に御色あり。ささとのしり騒ぐ程に、哀に傾しき方なし」\*大鏡一六「道長下、これはまた聴聞衆共、ささとわらひてまかりなき」

ささい【名】(因)川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡① ② 川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ささい【副】(多く)「と」を伴って用いる。人々が声をたて、さわがしいさまを表わす語。がやがや。さわさわ。\*落窪二「皆のしりて、ささとして出で給ふすなはち、あご告げに走りせやりたれば、栄花浦々の別、いかにいかにと、覚し渡る程に御色あり。ささとのしり騒ぐ程に、哀に傾しき方なし」\*大鏡一六「道長下、これはまた聴聞衆共、ささとわらひてまかりなき」

ささい【名】(因)川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡① ② 川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ささい【名】(因)川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡① ② 川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ささい【副】(多く)「と」を伴って用いる。人々が声をたて、さわがしいさまを表わす語。がやがや。さわさわ。\*落窪二「皆のしりて、ささとして出で給ふすなはち、あご告げに走りせやりたれば、栄花浦々の別、いかにいかにと、覚し渡る程に御色あり。ささとのしり騒ぐ程に、哀に傾しき方なし」\*大鏡一六「道長下、これはまた聴聞衆共、ささとわらひてまかりなき」

ささい【名】(因)川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡① ② 川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ささい【副】(多く)「と」を伴って用いる。人々が声をたて、さわがしいさまを表わす語。がやがや。さわさわ。\*落窪二「皆のしりて、ささとして出で給ふすなはち、あご告げに走りせやりたれば、栄花浦々の別、いかにいかにと、覚し渡る程に御色あり。ささとのしり騒ぐ程に、哀に傾しき方なし」\*大鏡一六「道長下、これはまた聴聞衆共、ささとわらひてまかりなき」

ささい【名】(因)川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡① ② 川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ささい【副】(多く)「と」を伴って用いる。人々が声をたて、さわがしいさまを表わす語。がやがや。さわさわ。\*落窪二「皆のしりて、ささとして出で給ふすなはち、あご告げに走りせやりたれば、栄花浦々の別、いかにいかにと、覚し渡る程に御色あり。ささとのしり騒ぐ程に、哀に傾しき方なし」\*大鏡一六「道長下、これはまた聴聞衆共、ささとわらひてまかりなき」

ささい【名】(因)川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡① ② 川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ささい【副】(多く)「と」を伴って用いる。人々が声をたて、さわがしいさまを表わす語。がやがや。さわさわ。\*落窪二「皆のしりて、ささとして出で給ふすなはち、あご告げに走りせやりたれば、栄花浦々の別、いかにいかにと、覚し渡る程に御色あり。ささとのしり騒ぐ程に、哀に傾しき方なし」\*大鏡一六「道長下、これはまた聴聞衆共、ささとわらひてまかりなき」

ささい【名】(因)川の水をきれいにするための小さなせき。福島県岩瀬郡① ② 川の浅瀬。長野県上伊那郡016

ささい【副】(多く)「と」を伴って用いる。人々が声をたて、さわがしいさまを表わす語。がやがや。さわさわ。\*落窪二「皆のしりて、ささとして出で給ふすなはち、あご告げに走りせやりたれば、栄花浦々の別、いかにいかにと、覚し渡る程に御色あり。ささとのしり騒ぐ程に、哀に傾しき方なし」\*大鏡一六「道長下、これはまた聴聞衆共、ささとわらひてまかりなき」











ささきせういち「佐々木惣一」憲法・行政法学者。鳥取県出身。京都帝大卒。憲法および行政法の権威として美濃部達吉とともに公法学界の中心的存在であった。京大事件で大学自治確立に努力、滝川事件で退官。立命館大学総長。第二次世界大戦後、新憲法作成の審議に加わり、「佐々木試案」を作った。文化勲章受章。著書「日本行政法原論」日本国憲法論など。明治一一一昭和四〇年(一八七八—一九六五)

ささきたかおき「佐々木隆興」医学者。東京出身。近江国滋賀県の豪族。号、道齋。四郎と称した。京極宗氏の子。はじめ北条高時に仕えたが、のち足利尊氏に従い、室町幕府創設に功があつて、近江、上総、出雲などの守護をかねる。歌道、香道、茶道のたしなみも深かつた。徳治元一応安六年(一三〇六—一三七三)

ささきたかおき「佐々木隆興」医学者。東京出身。京大教授、杏雲堂病院院長、佐々木研究所所長、癌研結核研各所長を歴任。たんばく質アミノ酸の研究、肝臓癌人工発生の研究でそれぞれ学士院賞を受賞した。文化勲章受章。明治一一一昭和四一年(一八七八—一九六六)

ささきたかおき「佐々木高綱」鎌倉初期の武将。四郎と称した。定綱の弟。母は源為義の女。源頼朝の拳兵に参じ、石橋山の戦いで軍功を立てる。宇治川の争戦では名馬を暖いけけすきで梶原景季と先陣の合戦をあげ、功により備前、安芸、周防などの守護となつた。のち實の薄いのを恨んで出家。生没年不詳。

ささきたかおき「佐々木高行」政治家。侯爵。土佐藩出身。初名は高富・高春。通称三四郎。早くから勤王の志を抱き、土佐倒幕運動の中心となる。明治三年(一八七〇)参議となり、のち司法大輔(たゆり)、工部卿、枢密院顧問官などを歴任。天保元一明治四三年(一八三〇—一九一〇)

ささきたかおき「佐々木高綱」室町時代の武将。近江の名族で、六角氏を称する。父政頼。初名四郎。近江国守護。応仁の乱に、山名宗全の下で細川氏の兵を破り、その後、細川勝元に属した京極氏と近江を争い、これに勝つた。乱後、近江にある多くの諸領を獲得し、管理した。永正一七年(一五二〇)没。

ささきちゅうじろう「佐々木忠次郎」昆虫学者。近代養蚕学・製糸学の開拓者。福井県出身。東京大学理学部卒業、東京帝大農学部教授。主著に「農作物害虫篇」。安政四一昭和三年(一八五七—一九三〇)

ささきちゅうたく「佐々木仲沢」蘭医。岩手の人。大槻玄沢について蘭学を修め、仙台藩医学教授となる。仙台藩最初の人体解剖を行ない「存真図

腋」を著す。寛政二一嘉永元年(一七九〇—一八四八)

ささきとうよう「佐々木東洋」医学者。江戸の人。佐藤泰然のもとで医学を修める。西南の役に軍医として活躍。のち、脚気病院の主任を経て、杏雲堂病院の前身を開設した。明治三年(一八九〇)には東京医学会を創立して会長となつた。天保一〇一〇大正七年(一八三九—一九一八)

ささきおぶな「佐佐木信綱」国文学者。歌人。東京帝大卒。三重県出身。佐佐木弘綱の長男。号は竹柏園。和歌の歴史的研究、万葉の基礎的研究に尽力。明治和歌革新運動を起こし竹柏会を設立。機関誌「心の花」を刊行した。著編書に、「万葉集の研究」「校本万葉集」。歌集に「おもひ草」「豊旗雲」。門下に川田順、九条武子がいる。明治五一昭和三八年(一八七二—一九六三)

ささきひろすな「佐佐木弘綱」国学者。歌人。伊勢石薬師の生まれ。信綱の父。号は竹柏園。著書に「古事記歌謡言解」。文政一一一明治二四年(一八二八—一九一〇)

ささきみつぞう「佐々木味津三」小説家。本名光三(みつぞう)。愛知県出身。明治大学政経学科学業。「石門捕物帖」「旗本退屈男」などを書き、大衆文学の分野で活躍した。明治二九一昭和九年(一八九六—一九三三)

ささきまこと「佐佐木茂素」小説家。京都出身。芥川龍之介に師事し「文藝春秋」同人として活躍。昭和一〇年(一九三三)菊池寛と芥川賞・直木賞を創設した。のち、文藝春秋新社社長に就任。創作集に「春の外套」、長編小説に「困った人達」などがある。明治二七一昭和四一年(一八九四—一九六六)

ささき「紅豆」名「ささげ(紅豆)」の変化した語。《季・夏》・羅葡日辞書「Coara 略 Saagano(ササギ)・タグイ」・日本一鑑野河話海・五・花木「苳眼(ササギ)・固連密(クマミ)・連茂(マメ)」。頭屋本節用集「小角豆 ササギ」。浄瑠璃・絶狩剣本地「四」ながいささぎが花はみじかふてみじかい栗の」

「園圃ササギ」(園圃) 園圃(園圃)

ささき「鶴」名「ささぎ」とも「鳥」みそささい(鶴)の古名。古事記下・歌謡「雲雀(ひばり)は天に翔(かける)高行(か)や速総別(はやぶさわけ)左邪岐(ササキ)捕らさね」。書紀「神代上兼方本訓」

「白鶴(か)を以て皮を以て舟に為(つ)くり、鶴(ササキ)の羽をかみて衣に為(つ)りて略(へ)ハ鶴(せう)し。此をば娑婆岐(ササキ)と云ふ」。新撰字鏡「鶴加也久支又左々支」(園圃)ササキ(小竹瀧)の約(大言海)。(2)ササキ(小)の義(言元梯)。(3)ササキ(小)の義(名言通)。(4)ササキ(小細毛)の転呼で小鳥の意(日本古語大辞典松岡静雄)。(5)ササキ(小鳥)の義。キは古語で鳥をいう語(東雅)。(園圃)金更上

代は「ささき」。平安には「ささぎ」形がみられるが、第二拍、第三拍の清濁はゆれたいらしい。今史平安〇〇〇(園圃)字鏡・和名色葉名義・書言

ささき「あぶみ」佐佐木鏡「名」ささき(佐佐木掛)に同じ。御伽草子「草木太平記有朋堂文庫所収」萬浦作りの太刀をはき、とう駒にささき鏡をかきいでたり

ささき「け」佐佐木掛「名」馬具の鏡あぶみの名。近江国日野(滋賀県蒲生郡日野町)でつくり出した。文政日本文学に刺鉄(さす)の刺えぐりを入れて、左右どちらにも装着できるという。佐佐木鏡。日野掛。随筆「貞丈雜記」三「佐々木掛といふ鏡の事略」力革にかける事にはあらず五六掛加賀掛などと云如く掛とは鏡を作る事を云也

ささき「けん」酒機嫌「名」酒に酔ったときの気分。酔い心地。一杯機嫌。ささきけん。さきけん。浄瑠璃・忠臣金短冊四「ノウおとましや、酒(ささき)けんもがまだ醒(さ)めぬか」。滑稽本・七偏人三・上「儲も七人の能楽者どもは、春の朝の酒機嫌(ササキケン)」。園圃ササキケン(園圃)

ささき「じんじや」佐々木神社「兵衛県出石郡但東町にある神社。旧泉社。祭神は少彦名命(すくなひこ)のみこと。大彦命(おおひこ)のみこと。産土神(うぶすな)がみとして崇敬された。(園圃)園圃」

ささき「じんじや」沙沙貴神社「滋賀県蒲生郡安土町にある神社。旧泉社。祭神は少彦名命(すくなひこ)のみこと。宇多天皇、大彦命(おおひこ)のみことなど。景行天皇の創建と伝えられる。(園圃)園圃」

ささき「つき」名「衣服の袖に「ささげ(紅豆)」をつけること。またその衣服。ささげつけ。歌舞伎・天満宮御供一六「桶懸りより紅梅姫、振袖、ささきつき、着流しにて出る」。歌舞伎・猿蓑万代「三立花道より、女三人、何れも広袖ささぎ付(ツキ)、着流し、後ろ帯にて略出て来たり」

ささき「しん」名「因縁にしん」を二枚におろして干したもの。北海道川(ささきにし)青森県津軽川(ささき)「笹葉」名「イネ科の多年草。屋久島以南の山野に生える。高さ〇・三—二・五。茎と葉はササに似ており、キビに似た長さ三〇—六〇センチの花穂をつける。(園圃)園圃」

ささき「り」名「笹葉」名「キリギリス科の昆虫。本州中部以南の平地に分布。体長二—一五ミリ。体は小形で細長く、全体が暗緑色で、側面、足の先前はねなどは黒褐色を帯びる。七、八月ごろ笹の葉の上などでキチ、キチ、キチと続けて鳴く。近似種にホシササキリ、オナガササキリ、コバナササキリ、ウスイロササキリなどがある。(園圃)園圃」

ささき「りゅう」リウ「佐佐木流」名「馬術の一派。近江国(滋賀県)観音寺城の城主、佐々木義賢を祖とするもの。\*武芸小伝「四」佐々木左京大夫義賢者、略

好三馬芸、而善、取略推曰「佐々木流」(園圃)ササキリュウ(園圃)

ささき「茶杓」名「抹茶(まっちゃ)をすくい取るのに用いる、細く小さい。竹、象牙、水牛、金属器(木地(きじ)、塗物)などで作り、珠光形・利休形などがある。ちやしやく。ちやしじ。\*俳諧・新増大筑波集・油糟・夏「あまり暑さにかがみこそすれ若竹をささくにせむと火を置て」

ささき「差錯」名「いり乱れること。くいちがうこと。転じて、あやまり。まちがいがい。手違い。哲学字彙「Differ 差錯 過失 誤謬」。\*青春「小泉風葉」春「円満なるべき造化の計画も故(こ)に差錯(ササキ)を来してから」。\*爾雅注「釈言(爽、差也)皆謂(用)心差錯(不專)」。園圃(園圃)

ささき「自力下」ひささける。ささき「自力下」語義未詳。花やかに栄える、花やかにきらめくなどの意か。一説に、にぎやかに花やぐ意かとする。\*万葉「一六・三七九一「古(いにしへ)狭々寸ササキしわれや、はしきやし今日(けふ)も子等にいさにとや思はえてある(作者未詳)」。\*武藤本竹取「毛の末には、金(こがね)の光し、ささきたり」(園圃)竹取物語の例は「ひかりをさきたり」「ひかりささきたり」の本文を有するものもあり、「かかやきたり」の誤写とする説もある。

ささき「他方下」ひささける(推) ささき「坐」名「すわって行なう作業。特に囚人の場合について。\*太政官達第八十一号明治一四年九月一日四六条「未決監に在る者坐作の業を為さんと請ふときも亦同じ」(園圃)園圃」

ささき「笹草」名「①ささ(笹)に同じ。\*風俗歌拾遺「承徳本古語集所収信濃・信濃左左左ササクサ」や馬に飼ふなややはれ駒に飼ふなや」。\*梁塵秘抄「二・四句神歌「王子のお前の笹草(ササクサ)は、駒に食めども猶繁し」②イネ科の多年草。本州中部以西の山林に生える。高さ四〇—九〇センチ。葉は薄く長さ一五—二〇センチの広披針形で、五—六枚生じる。夏から秋にかけ、緑色の小穂が円錐形につく。漢名、淡竹葉。ささのはぐさ。しやし。\*大和本草九「淡竹(ササクサ)本草澤草下に出たり。ささの葉に似たり」。\*日本植物名彙「松村任三「ササクサササノハクサ淡竹葉」(園圃)園圃」(園圃)園圃」

ささき「ま」名「笹葉」名「あなぐま(穴熊)」の異名。\*重訂本草綱目啓蒙「四七、獸熊くままぐま奥州月形あるをまぐまと云、月形なくして小なるをささぐまと云」。\*焚火志「賀直哉「屹度笹熊でせう。驚かぬかに食はれたのかも知れませんよ。笹熊は弱い獣ですからね」(園圃)ササグマ(園圃)園圃」

ささき「蜘蛛」名「①蛛形類真直クモ目ササグモ科のクモ。体長は一センチ弱。背甲は長卵形で



近くまで上げる。万葉一九四二〇四「吾が背子が捧(ささげ)て持てるはほがしはあかも似るか青き蓋(さぬき)がさ(恵)行」

安初期点此の尼拘律の樹は手を挙(ササケ)しは頭に及べりき。竹取「つばくらめ子産まむとする時は尾をささげて七度めぐりてなむ産み落すめる」

草子・伊曾保物語下二〇「人としてわが背(ほまれ)をささぐる時は人の憎みをかうむりて果てにはあやまりをいひ出さるる物なけれ」

願祝言「求長寿得長寿の礼拝、袖をつらね、幣用へいはく「礼奠を捧(ササゲ)高良本(本)の事ひまする。献上する。献納する。書紀雄略一二年一〇月(凶)書察本訓「彼の疾く行くを佐びて、庭に願(た)ふれて、擧(ササケ)る所の儀(み)つづけるを覆(ほ)しつ」

たてまつり給ふ。大洲代抄「今日本でも六月且にはどの山よりか内裏へ水りよ捧げると云ふも其の礼とみへた」

へまありて、声をささげささげ、さささまの事申し「⑦自分の真心や愛情などを相手に示し、さし出す。相手に尽くす。そそぐ。因園幼児を、用便のため抱きあげて前へ差し出す。広島県比婆郡那徳島県内、珠庵雑記和訓葉・大言海」

ささげわたす「捧渡(他サ四)部(しとみ)などを全部上方へあげる。大和二条家本付載「西の京六条わたりに、築地(い)ち所々崩れて草生ひしげりて、

さすがに所々部(しとみ)あまたささげわたしたる所あり」

ささ(二)【笹子】(名) 中冬(のころ)巢立ちする鶯(うぐいす)の子。季・冬。雁列(皆吉夷)雨(絵)の売れし(画室)のさび(笹子)鳴く。因園(會)之(回)

ささ(三)【狭小】(名) 京都貴船神社の祭に振り歩く小さな神輿(みこ)也。江戸時代、貴船神社の九月中の祭に、一日から九日までの間、京都の子どもが市中をかづきまわつた小型のもの。後奈良天皇の時、九月に小児の疫病がはつたのを貴船の神のたたりとし、小さい神輿を造つてこれをしずめたことに始まるという。日次紀事九月一日「貴布禰神供、貴布禰狭小神輿(ササコシ)自今日(至)九日(落)下兒童昇小神輿(謂)貴船狭小神輿也。名所都島六、貴布禰社、小神輿を昇貴舟の狭小輿(チャチャゴシ)ササコシと呼ばれて、町を歩行(此)事所々にありといへども、別して子供あつまるは、本誓願寺通小川のほとり今に有。因園(會)之(回)

ささ(四)【笹籠手】(名) しのごて(笹籠手)に同じ。説本・権説弓張月残・六二回「荒男等五六十人、黒き衣に黒き頭巾を戴たる、笹籠(当)ササコテに木皮の脚絆(あゆび)して長き刀を跨(よ)こした(た)る」

ささ(五)【持】(連語) ささげての意の上代東国方言。ささげ持つて。万葉一〇四三二五父母も花にもがもやくささくら旅は行くとも佐佐(己)臣(ササコ)テ行かむ(文部黒)当(回)

ささ(六)【酒事】(名) さかごと(酒事)に同じ。浮世草子浮世栄花一代男一三「なる程小盆にてしゃく取は淀の人すみ濁るをや神ぞ知るらん男まぜのささ事といふ」

ささ(七)【トネル】(名) 笹子(トネル)は美(unnel)に同じ。秩父山地と御坂(みさか)山地の交界点にあたり、古くから甲州街道の難所として知られた。因園(會)之(回)

国鉄中央本線笹子駅と初鹿野(はじかの)駅の間にある鉄道トネル。明治三五年(一九〇二)完成。全長四五六六尺。甲州街道(国道三〇号線)、山梨県大月市と大和村の間にある道路トネル。昭和三年(一九五八)開通。全長二九五三尺。因園(會)之(回)

ささ(八)【餅】(名) 山梨県大月市笹子の名物で小判形の餡(あん)入りの餅。因園(會)之(回)

ささ(九)【小屋】(名) 富士登山者の宿泊のため、山麓から頂上までの道を一目から一〇合目まで等間隔に分けて、その一合または半合ごとに設置した石室の宿舎のこと。しのごや。日次紀事六月「此月如々人攀(登)富士山、略(坂)路中間岩窟構小屋是謂(笹)小屋(ササコヤ)也。因園(會)之(回)

ささ(十)【餅】(名) 尾張國笹島村(名古屋市中村区笹島町付近)で焼かれた菓(焼)一種。文化年間(一八〇四一八)、文七という者が焼きはじめたという。尾張名所図会前編二・愛知郡(古)事類苑・産業一三「笹島焼、磁器。広井なる笹島にて製す。近來の新製にして、菓(焼)の模様さまざまに色どり、美し(酒)書・并(糖)シ(名) 糖味(糖)をいう女房詞。日葡辞書(の)糖(糖)ササチ。すなわち、ヌカミン(歌)糖(糖)つくつたミソ。女性語。■咄本内閣文庫本醒睡笑一「なべて上臈(が)たには、ささちんといふを禁中にはまらかねとや」

ささ(十一)【善薩】(名) 米を善薩といふところからササは善薩の義、チンは應。米を善薩といふところから(東雅)。二ササチン(酒)應の義和訓葉。三ササチン(酒)應の義(但言集)大言海。四ササを米と解する説は誤り(大言海)。五ササはワササのササ、ジンはジンダ(種)粒(志)不可(記)。六作進退(名) 立居ふるまい。身のこなし。行儀。周礼(夏)官・大司馬(教)坐作進退(疾)徐(疎)教(之)節。因園(會)之(回)

ささ(十二)【笹】(名) 植物「たがね(草)」の異名。重訂本草綱目啓蒙一六・石草「崖(崖)略(略)ささすげは一名たがねさう、尾州」

ささ(十三)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。ささ(十四)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。ささ(十五)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。

ささ(十六)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。ささ(十七)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。ささ(十八)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。

ささ(十九)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。ささ(二十)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。ささ(二十一)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。

ささ(二十二)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。ささ(二十三)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。ささ(二十四)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。

ささ(二十五)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。ささ(二十六)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。ささ(二十七)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。

ささ(二十八)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。ささ(二十九)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。ささ(三十)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。

ささ(三十一)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。ささ(三十二)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。ささ(三十三)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。

ささ(三十四)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。ささ(三十五)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。ささ(三十六)【笹籠】(名) ささまきすし(笹籠)に同じ。

を除くとしてあらそひ取る事、近辺氏子の家より出て道にて団子は皆取られ、穀竹計神前へ納め、是神事のやうに成」②うるち米の粉ともち米の粉をこねて餛あんを入れ笹の葉で包んで蒸したものを、新潟県

の名物。笹葉サタン」(巻之四) ささちまき【笹葉】名 笹の葉でくるんでつくった粽。笹を三角に畳み、これにもち米とうるち米を混ぜて荒びきにしたものをに入れて結び、蒸したもので、砂糖入りのきな粉をつけて食べる。長野県山ノ内町などの名物。笹巻粽。《季・夏》\*宗長日記人の許より笹餅・せんべい二色送られしに心ざしみやまのしげき笹粽数は千秋千べいにしして。\*俳諧毛吹草追加上「原のささねと云ふを聞てたばねてや」はらの笹餅令巾」。\*俳諧八番日記猫の子のほどく手つきや笹粽(ささちまき) (巻之四)

ささづくり【笹作】名 ①刀剣の縁頭(ふちがしら)や鑑(こじり)などに笹の葉の模様をつけること。また、その刀。②キヌヤサヨリなどの身の細い魚を刺身にする時の切り方。三枚におろした身を斜めに切るのと切り口が笹の形になるのでこの名がある。 (巻之四)

ささづつ【酒筒】名 酒を入れる筒。酒を入れて持ち運ぶ容器。さづつ。 (巻之四)

ささって【名】(因) ①明後日。あさって。愛知県知多郡河和町②あさって。福井県③信濃④岐阜県⑤愛知県碧海郡⑥三重県⑦鹿児島県種子島⑧宝島⑨やのあさって。秋田県山本郡⑩山形県村山⑪ささづつ【笹苞】名 ①「つ」とは包み物、土産物の意。笹の葉で包んで作ったつと。\*俳諧続猿蓑上「何ぞの時は山伏になる曲翠。笹つとを棒に付(つけ)たるはさみ箱(臥蓑)」。 (巻之四)

ささつばた【笹葉】名 ①「ささ」は「笹葉」の変化した語。\*酒落本・自惚鏡「武さ何やら、ささつばの先きへすすをつけたよふに、ささわさばかりして」 \*売花翁(斎藤緑雨)「朝夕てん屋物を取寄せて食れもせぬ笹(ササ)葉」の代まで払ふ仕儀となりては、湯ヶ原ゆき(國木田独步)「自分は二個の空箱の二には笹葉ササツバ(が)残りに、は着着の汁の痕だけが残って居る奴をかたづけ」 (2)運業者、お調子者。\*雑俳・新編柳樺「三、奥の笹葉鏡口へ出てふさげ」 (因) ①笹の葉。群馬県佐波郡②(ささ)ば、滋賀県彦根③竹の葉。静岡県島田④ (巻之四)

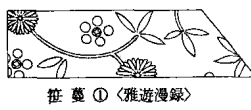
ささつばた【名】植物「からちばな唐橘」の異名。\*重訂本草綱目啓蒙九・山草「百両金からちばな

ささつばた【芸州】 ささつばたき【笹叩】名 ①「ささ」は「笹叩」の变化した語。\*滑稽本・浮世風呂「前上お福宜(ねぎ)どのおうらわ(へ)も、市女(いちご)この(笹)ササ(は)たきもいらね」 (2)はたきもいらね」 (巻之四)

ささつば【笹葉】名 着物の襟の形が、細長く、笹の葉のようになったもの。多くは男子用。\*雑俳・新編柳樺「二三、笹葉に気がねは頬の敷にらめ」 (巻之四) ささづめ【笹爪】名 五徳で爪の上方の曲がりくねったものが、笹の葉を折ったような形のもの。その爪の長いものを長笹または大長爪、短いものを中爪、小さいものを小笹または小爪という。 (巻之四)

ささづり【名】(因) ①笹の葉を蔓草にかたどったような模様。②「ささ」るぎれ(笹蔓切)の略。\*古今名物類聚名物裂之部「一、笹づり」 (巻之四)

ささづるとんす【笹蔓絞子】名 ①「ささ」るぎれ(笹蔓切)と同じ。\*随筆・雅遊漫録「四、笹蔓絞子、略」地色うすもへきもやうに笹りんどうのから草、間にこぼれ梅、又間に鳥入たるも有、但紋黄唐茶。 (巻之四) ささづるとんす【笹蔓絞子】名 ①「ささ」るぎれ(笹蔓切)と同じ。\*随筆・雅遊漫録「四、笹蔓絞子、略」地色うすもへきもやうに笹りんどうのから草、間にこぼれ梅、又間に鳥入たるも有、但紋黄唐茶。 (巻之四)



笹蔓①(雅遊漫録)

ささづり【名】(因) ①「ささ」るぎれ(笹蔓切)と同じ。\*随筆・雅遊漫録「四、笹蔓絞子、略」地色うすもへきもやうに笹りんどうのから草、間にこぼれ梅、又間に鳥入たるも有、但紋黄唐茶。 (巻之四)

ささづり【名】(因) ①「ささ」るぎれ(笹蔓切)と同じ。\*随筆・雅遊漫録「四、笹蔓絞子、略」地色うすもへきもやうに笹りんどうのから草、間にこぼれ梅、又間に鳥入たるも有、但紋黄唐茶。 (巻之四)

ささづり【名】(因) ①「ささ」るぎれ(笹蔓切)と同じ。\*随筆・雅遊漫録「四、笹蔓絞子、略」地色うすもへきもやうに笹りんどうのから草、間にこぼれ梅、又間に鳥入たるも有、但紋黄唐茶。 (巻之四)

ささづり【名】(因) ①「ささ」るぎれ(笹蔓切)と同じ。\*随筆・雅遊漫録「四、笹蔓絞子、略」地色うすもへきもやうに笹りんどうのから草、間にこぼれ梅、又間に鳥入たるも有、但紋黄唐茶。 (巻之四)

上鬼城「蘆さくや琵琶湖に落つるささ流れ」 (巻之四) ササナガレ【名】(因) ささなみ【細波小波連】名 ①(古くは「ささなみ」)風が吹いて立つ、細かく小さな波。ささなみ。さされこなみ。\*万葉「二・三〇四六、左佐浪(ササナミ)の波越す安壁に降る小雨間も置きてわが思はなくに作者未詳」\*名語記九「ささなみ如何。しばしばなみ也。たびたびかさなる心也又云、しばしばは、水面に、しばしばよる心也。文のあるをささなみといへる也。\*広本拾玉集二「汀にもあらぬ桜の枝にさへささ浪よする志賀の山風」。\*御伽草子浦嶋太郎「汀涼しきささなみに、水鳥あまた遊びけり」\*日葡辞書(Sesari)「サザナミ」。すなわち、チイサイナミ」。\*浄瑠璃・平家女護島④「およぎのぼればさら、さら、さら。ささ波たかく押ながされ」 \*俳諧文政句帖「五年二月、津や雲雀の際の釣舟」 (2)和菓子の一つ。うるち米の粉を砂糖で固め、表面に近江八景を浮かさせた落雁(らくがん)。滋賀県堅田の名物。\*随筆・一語一言「御菓子品々略」ささなみ ③馬術で、静かに合わせる手綱のあやうさ方の一つ。\*鹿足之次第「かく足と云は、鹿の野原を走ごとく成を鹿足と名附、略何れにても不拍子なる馬の分には、手まへへさつと引切て、跡はささ波取合可、乗なり」\*武家名目抄「術芸部、尻引、大坪流馬書云ささ波にてすりて先あらけつりをする也扱口やうやくたわき候時尻引をのる」 (4)「ささなみおり(漣)」の略。\*歌舞伎・独道中五十三駅、四幕「染めやれ、染めやれ、君様のおもはく好みに、色

も変らぬ染め物は、そも何々ぞ。一に友禪、二に錦、三に漣(サザナミ)、四に紋り」 (「ささなみ」)琵琶湖の西南沿岸地方をいう。また、近江国(滋賀県)の古名。\*万葉「一・三二、左散難彌(ササナミ)の志賀の大わたよむとむも昔の人にまたも逢はめやも、柿本人麻呂」 (巻之四)「万葉集」には「ささなみ」の形で用いられているので、「ささなみ」を枕詞とする説もある。 (因) ①小さい白雲が空一面に並んだもの。兵庫東条地方郡次06。②しょうゆの表面に浮かぶ白いかび。宮城県石巻市。大分県西国東郡。 (因) ①ササは細小の義(日本釈名・万葉代匠記)。②サザはサザラ、サザレの略(万葉代匠記・冠辞考、類聚名物考)。③ササは些少の意か、あるいはササヤク意か(日本古語大辞典・松岡静雄)。④たびたび重なる意から「ササナミ」の義(名語記)。 (巻之四) ⑤代は「ささなみ」鎌倉以降は「ささなみ」か。 (巻之四) ⑥「漣」字鏡・和玉文明伊奈天正鐘頭・黒本・易林・書。 ささなみ【名】鳥ちようびけい(長尾鶏)の異名。 (巻之四)

ささなみ【名】鳥ちようびけい(長尾鶏)の異名。 (巻之四)

ささなみ【名】鳥ちようびけい(長尾鶏)の異名。 (巻之四)

ささなみ【名】鳥ちようびけい(長尾鶏)の異名。 (巻之四)

ささなみ【名】鳥ちようびけい(長尾鶏)の異名。 (巻之四)

ささなみ【名】鳥ちようびけい(長尾鶏)の異名。 (巻之四)

ささなみ【名】鳥ちようびけい(長尾鶏)の異名。 (巻之四)

ささなみ【名】鳥ちようびけい(長尾鶏)の異名。 (巻之四)

ささなみ【名】鳥ちようびけい(長尾鶏)の異名。 (巻之四)

ささなみ【名】鳥ちようびけい(長尾鶏)の異名。 (巻之四)

ささなみ【名】鳥ちようびけい(長尾鶏)の異名。 (巻之四)

ささなみ【名】鳥ちようびけい(長尾鶏)の異名。 (巻之四)

ささなみ【名】鳥ちようびけい(長尾鶏)の異名。 (巻之四)

ささなみ【名】鳥ちようびけい(長尾鶏)の異名。 (巻之四)

ささなみ【名】鳥ちようびけい(長尾鶏)の異名。 (巻之四)













